第５章　札幌トモエ幼稚園における
基礎的人権教育の実践

第３節　母子の情緒を安定させ心の発達を促す乳幼児精神医学的実践

人間が人間として生きる上で重要な土台となるのが、情緒的な安定である。いかなる知識も技術も、安定した情緒の上に築かれていなければ、それらは砂上の楼閣であるのみならず、人間に危害を及ぼすものとなりかねない。

情緒安定の最も根源的な基盤は乳幼児期の生活環境であり、中でも特に要となるのが母子関係である。すべての人間にとって母親の存在は、身体的にも精神的にも故郷であり母港である。人は１０か月間母の胎内で育まれている間、母体によって身体的に保護されているだけではなく、精神的にも包み込まれ育まれているといえる。

母が安定して、胎児である自分にあたたかく語りかけてくれているか、それとも母が精神的に不安定で、自分に意識を向ける余裕もないのか、といったことを胎児は敏感に感じているのである。母の気持ちが安定していると、胎児も活発に動き、順調に発達していく。母の不安感が強過ぎると、流産などの不幸な出来事につながることがある。

出産後も、人間は母の精神的庇護の下に育まれる。０・１・２歳と発達の段階に応じて、抱きしめられ、あやされ、語りかけられることによって、子どもの情緒は安定していく。母と子の愛着行動が充分に満たされていると、子どもは次第に外の世界に目を向け、テリトリーを広げていく。まさに母は心の基地なのである。

しかしながら現代では、母性を拒否する母親が増えている。子を産んで初めて、子どもと関わることができない自分を発見する女性が多くなっている。母親自身が、情緒安定が不充分なまま育てられてきた影響が大きいのである。

子どもの目を見てあやすことができない、子どもを抱きしめることができないなど、母親が安定して子どもと関わることができないと、その子どもの情緒は安定しない。その影響は、すでに１・２歳から心の病など様々な精神的問題として現れている。

母の不安は子どもの不安定につながり、母はますます不安になる。この悪循環を断ち切ることが重要である。母親の不安が解消すると、子どもの情緒も安定していく。するとさらに母は安心して子どもと関わることができる。この時期の母子関係には「母子相互作用」が働いているのである。

子どもの情緒安定の基礎は、まず何よりも母親の精神的安定であることがわかる。母親が乳幼児期の子どもに与える影響は、子どものその後の人生を大きく左右する。

３０年以上も前、お菓子の袋に印刷されていた感動的な詩があった。小学校３年生の女の子の詩である。

「新しい布団　ふわっと沈んだ　お母さんに抱っこされているみたい」

抱きしめられ、情緒が安定することは、人生において確かな基盤となるのである。

トモエでは、母子間の良好な相互作用が生まれるように、母子それぞれを援助し指導している。また、母の精神的安定には、夫との関係、祖父母や地域社会との関係も重要な要因であるため、親族も含めた家族全体に対する援助指導を行っている。

親がリラックスできる空間を確保すること。親同士で気の合う仲間を見つけて、愚痴をこぼし合ったりアドヴァイスし合ったりできる関係を創れるようにすること。共に何かを成し遂げ、充足感と意

欲を体験すること。様々な学びを通して子ども理解を深め、子どもに寄り添い、子どもの成長の邪魔をしない大人になること。感性豊かで素直な子どもたちに多く関わり合うことで、大人自身の優しさや思いやりを広げていくこと。数多くの子どもと大人と関わり合うことで、親たちはこれらを自然な形で体得しているのである。

事例（１６）　子どもたちと魂と魂でぶつかり合う

子を産み親となることで、それまで感じなかった多くのことを感じ、考えもしなかった様々なことを考える機会が訪れる。我が子を通して自分を見つめ直し、子どもを理解していくのである。その過程では、自分の培ってきた価値観が揺らぎ始め、崩れ落ちることもある。新たな人間観を構築しなければならないこともある。人によっては、つらく苦しい道のりになる。しかし、その困難な道をたどっていくことを通じて、親は子によって親として育てられるのである。

親として育てられる道を歩み始めた、ひとりの母親のレポートを紹介する。

土曜日の研修会で、とても貴重なモノを頂きました。ありがとうございます。

まだ転園してきて５ヶ月目、顔と名前が一致しない子どもやお母さんやお父さんが沢山居ます。いつもより深い関わりを持つチャンスのある行事に参加していれば、少しづついろんな人達とお話し出来て、顔と名前を覚えられるかな…ひょっとしたら普段聞けない、特別な話も聞けるかな…なんてそんな不純!?な動機で参加しましたが、思わぬいいものをもらって帰って来ました。

トモエの毎日や我が子と向き合う毎日で、私の頭の中には疑問符？？？？？が佃煮を作れる程いっぱいあります。どーしてこんな事するのかな？こんなこと言うのは何か理由や原因があるのかな？どう対処すればいいんだろう？何故？どうして？どうすれば？の雨嵐なんです。

そのなかの一つ、何人かの子が突然そばに来て「デブ、くそ婆」「デブの子はデブだ」と言いに来るのです。理恵はデブかな？これも疑問。勿論唖然として、言葉も出ない程驚き、呆れ、ちょっぴりムッと来ました。そしていつもの、どーしてだろう？が頭の中で渦巻いたのです。太った人に何か恨みがあるのか？私や理恵はその子に何も嫌な事もしていないし、関わりすら持ってない。どーしてだぁー？どう対処してどう扱えばいいの？そんな疑問がずっと頭にありました。何回目かに私も反論しました。「そんなこと言ってくる〇〇も変だぞー」と、その子は不意の反論にたじろぎながら別の捨てせりふを残してその場を去りました。うーん、対応に失敗したかなぁー、なんてまた疑問が残ったのです。

その他にも戸惑っている私の心を読んでいるかの様に、いろんな子が攻撃を仕掛けてきます。

そーいえば、初めてトモエ見学に行ったその日に、言葉の通じない翔太郎がどこからか突然走ってきて、私に絡みついて来た事もありました。何度も繰り返し、突然不意に襲ってくるので、しまいには私の方も何時来るか構えていて、来たらくすぐってふざけて遊んだっけ。からかわれやすい体質なのかしら…。

そんな事を思っていた時のあの研修会で、園長がおっしゃいましたね。それは魂と魂のぶつかり合いで、そんな関わりをもてるのは勲章なのだと。沢山ぶつかって理解し合って行きなさい、と。

厳格な親に押しつぶされて育ってしまった私には、ぶつかり合うという選択肢は有りませんでした。とにかくもめ事、相手とぶつかる事から逃げて避けて生きて来たのです。ましてぶつかり合って理解し合うという魂すら無かった。だからトモエでも人一倍戸惑って驚いてしまうのかも知れません。ぶ

つかるのが怖くて、何もかも譲って、引っ込んで生きた子ども時代があるから、今その反動で夫とぶつかってばかりいるのかも知れません。夫婦の場合は、ぶつかっても、なかなか理解できずにいます。大人になってしまったからなのか、夫が面倒がって黙秘権を行使するからなのか…。これもまた疑問（笑）

そっくりな事をトモエのお母さんも言っていました。私が何気なく相談した攻撃型の子の対処について、それは一種の挨拶で、そういう関わりをもてずに終わる人もいるのだから、関われる事が素敵なのだと。

やっぱりトモエって凄い。そのとき思ったのです。

園長が会得したその感覚を、トモエのお母さん達も何年かの通園生活で会得している、その事の凄さ。

あぁー、またひとつ宝物をもらった、やっぱりトモエに来て良かった、トモエから目が離せない、と感じたのです。

私自身の子ども観も変わりました。

トモエに来る前は、何となく親や大人の言う事を良く聞いてくれて、その通りに行動してくれる子がいい子、という大人にとって都合のいい、扱いやすい子に惹かれていました。トモエに来て驚く事の連続で、やっと私自身が子どもという存在を解っていなかった為の驚愕だったのだと気が付くようになりました。

それが解ってくると、理恵も普通の子どもらしい子だと安心出来たのです。どーして何故の疑問符が付く行動にも、子どもらしい反抗、攻撃、と納得できます。がしかし、どう対処の方はやっぱり疑問も多いのですが…。

一つ一つ、落ち葉を拾うように、答えやヒントが見つかって行くのも、トモエだからなんだな…と感じます。

残すところ通園生活あと一年ですが、その間に拾い切れなかったヒントや答えを探しに、卒園後も私だけトモエに向かおうかなとぼんやり思ったりします。でも子どもが一緒じゃない登園はお昼が寂しいかな、一緒にヒント拾いに登園するお母さんが沢山居たらランチも楽しいな、なんて勝手な事も思ったり…。

残りの通園生活、佃煮が作れないくらい疑問符を減らせたらいいな、とは思っていますが、いかんせん育児は奥が深い。もっともっと疑問が溢れてしまったら、園長、？？？？？の佃煮を食べてくださいますか！？

事例（１７）　子どもたちから学んで母親が変わる

母親は、我が子だけではなく多くの乳幼児と関わることで、子どもを理解する力がついていく。乳幼児期は特に、子どもから優しさや思いやりなど人間にとって最も大切なことを学ぶことができる。母親の子ども理解が深まることで、子どもの情緒も安定していく。この時期に母親が安定して、子どもとちょうど良い距離感を保てるようになると、この良好な親子関係は小学校以降何年たっても続いていくのである。

母親が子どもたちから多くの優しさを学んでいる例のひとつが、次の手記である。

私たち親子が初めてトモエを訪れたのは、大阪から札幌に越して来てからまだ２ヶ月も経たない、

昨年の１１月のことです。山の中にある幼稚園の噂を聞いたその日にトモエのホームページを見て、見学に行きたい旨の電話をしました。転勤族のため、札幌に住めるのは長くても３年。ここにいる間に北海道ならではの経験がしたいと思っていた私にとって、大自然に囲まれた、しかも親子で通える幼稚園が、とても魅力的に思えたのです。この時、貴之はまだ１歳８ヶ月だったので、見学に行った日に、本人の口から「楽しかった。また、行きたい！」という言葉はもちろん聞けませんでした。が、私の中で直感的に「子供だけでなく、私自身が成長できる場所を見つけたかも」と感じたのです。その理由は、たくさんの人達との関わり合いがもてるから。トモエではたくさんの園児の保護者が子供たちと一緒に登園してきます。そして、スタッフと保護者が協力しあって子供たちの園生活を支えています。表面的ではなく、深く人と関わる中で、自分にないものを見つけて、少しでも相手から学びたい。それを繰り返しながら、成長できる人生をおくりたい。その想いから、貴之の為というよりは自分の為に通い始めたのです。そして、半年が過ぎ、私が「教えられたな」と思えたのは、驚くことに大人からよりも、子供たちからの方が多かったのです。特に印象に残っている事を紹介します。

・　・　・　・　・　・　・

　いつも貴之を可愛がってくれる、年長の男の子との会話。
「貴之、仲間にいれてやるぞ。」と誘ってくれるのですが、眠いのか、私の側から離れない。「せっかく仲間に入れてやるって言ってるのに。もう、誘ってやらねーぞ。」と言われるのではないかと心配していると、（きっと、私がそう言ってしまう意地悪な子供だったのでしょう…。）「今はママがいいんだな。よし、遊びたくなったら、来ていいぞ！」

・　・　・　・　・　・　・

　ある日の園バスの中。
　年長の男の子から車のおもちゃを借りて遊んでいた貴之が、貴之と同じ年の男の子と、その車の奪い合いになった時。「それ、俺のおもちゃだぞ。ケンカするなら返せよ！」と言われるかなと思っていると、「二つあればいいんだけどさ。レストランで一つしかもらえなかったんだよなー。」

・　・　・　・　・　・　・

　卒園後すぐの引越しを控えた年長の女の子との会話。
「お引越しの準備は大変だね。要らないおもちゃとか整理しなきゃいけないもんね。」と話しかけると、「貴之ママ、おもちゃには思い出がたくさんつまってるから、捨てないんだよ。大切なお友達にあげるの。」と言われて、後日、貴之にと絵本を４冊もらいました。

・　・　・　・　・　・　・

　子供たちとの会話で、自分が情けなく思える事が度々ありました。なぜ私はこの子達とまったく違う考え方をするのだろう？明らかにこの子達の方が素敵。大人になったからではなく、私は子供の時からそんな考え方しかできない子だったんだろうな。でも、貴之にはこの子達みたいな受け止め方ができるようになって欲しい。その為には、私が変わらなくてはと思いました。そして、トモエに来た日からよく耳にする、「トモエの子供たちは周りから尊重されているから、相手のことも尊重できるんだよ。」という事について考えるようになりました。相手を尊重する事は、私にとってとても難しく感じます。トモエに来てから、自分の子供の頃を振り返る事が多くなりましたが、両親に大切に育ててもらったという感謝の想いはあっても、尊重されて育ったという実感がまったくないからです。父が厳しい人で、二つ違いの姉とのケンカも、理由を聞かれることなく、げんこつを一発づつもらって終わりでした。特によく覚えているのが、８歳のときに旅行先で姉一人がトーテムポールに登って写真をとってもらい、私も同じように撮りたいと頼んだ時、同じ場所で撮る必要がないと思われたの

か、駄目と言う返事。しつこく頼むと「わがままを言うな。」と怒られ、叩かれた事。今まで、私にとって、こういった事はわがままなのだと思ってきたし、実際に貴之にも似たようなことで「わがまま言わないで！」と言ってしまっていました。でも、トモエに来てから、子供なら当然のことで、わがままなんかじゃないんだ、という事にやっと気付けたのです。また、今まで子供との信頼関係の築き方を意識したこともなく、自分の育児に少なからず不安を抱えていましたが、「トモエに来て、心を開いていれば私も変われる。」という想いが日に日に強くなってきています。

これまで人との出会いにとても恵まれた人生を送ってきましたが、札幌でもこんな嬉しい出会いが待っていたなんて思いもしませんでした。なんとか卒園まで札幌に住めることを願いながら、今は親子楽しく通園する日々です。

事例（１８）　子どもは大人の心を見抜き配慮している

大人たちは乳幼児を、何も知らない者、何もできない者として、侮って見ている。しかし、子どもの感性は驚くほど豊かなのである。それは大人たちの想像を軽く越えてしまうほどである。

大人は、自分が子どもに対して配慮してあげている、と思い込んでいる。ところが実は、子どもの方が大人に対して配慮して接している場合が多いのである。

２歳年下の妹がいる、６歳の男の子の例である。

妹は母親から片時も離れず、甘えている。彼は母たちから離れて、ひとりで遊んでいる。母は兄のことが気になっているのだが、なかなか関わることができない。

そんな母に、彼はこう言ったという。

「お母さん、ぼく大丈夫だから。一人で遊んでいても心配しないで。楽しくやっているから。妹の面倒を見ていいからね。」と。

それは、妹と多く関わり兄である男の子となかなか関われないでいる母親の心境を察知して、母に配慮して言った言葉である。母親は、「私の心を見抜いている」と、我が子の観察能力の素晴らしさと優しさに感動していた。

事例（１９）　我が子と素直に会話し合う幸せ

親が子どもの人格を尊重し、互いに一個の人間として関わり合うことで、子どもは安心して素直に自己を表現する。大人は、乳幼児本来の姿である優しさや素直さから、子ども理解を深め、人間について学んでいるのである。

次の文は、６歳と１３歳の２人の男の子をもつ母親のレポートである。

卓也が「お母さん…愛ってな～に？」と、二人で車に乗っていたら突然聞いてきた。卓也は窓の外に目をやりながら、何気を装って聞いているが、とても知りたがっているというのは、その小さな背中からよみとれた。「そうね～」と一呼吸おいてから、唐突のことに私も一瞬たじろいだが、心のままに応えた。私がその時、卓也に応えたのは、「愛ってね～目には見えないんだけどとても大事なもので、人はみんな愛がないと生きていけないのよ。だからお母さんは卓也のこといっぱい愛するからね。そうしたら卓也も自分のことを愛する人になって、人のことも愛せる人になるんだよ～」と真剣に愛を持って応えている自分がいた。それに対して卓也は「あ～！あ～！そういうことね、だから愛

するとか愛されるとか言うんだね～」と妙に納得した返事を恥ずかしそうにしながら、相変わらずの背中を向けたまま返してきた。その後ろ姿から漂うしっかりと私の心を受け止めている小さな心に、運転をしていなかったら体ごとギューっと抱きしめたくなるくらい愛おしさを感じた。それを感じてか、振り返り満面の笑みを卓也は私にくれた。

なぜそんなことを卓也が聞いてきたかというのにも訳があった。ここ一ヶ月くらい、うちでは『愛』だの『心』だのという人間の不思議さについての会話が、卓也の頭上をとびかっていた。それは時に、やさしく暖かな空気感の時もあれば、過去を振り返ってのシビアな話の時もあった。卓也にしたら何がなんだかわからないけど、今までと家の雰囲気が違うぞ～というのを肌で感じていたのだと思う。それが、ここにたどり着いての質問につながったのだと思う。

そんな、ここ最近の我が家では中学２年生の長男〔達也〕もまじえ、『心』についてよく会話するようになり、今までの自分に気づくのに、家族の中でお互いがお互いの心の歪みや素直になれない自分について話をした。そんな私は、言葉や視線や態度から、子どもの真っ直ぐじゃない心を見つけると、早く治したくなって、ことあるごとに指摘し続けていた。時にやさしく、時に厳しく…。すると、ある時、長男が「お母さん、達也はいいけど、卓也に心、こころって言ったって、まだ無理だよ。いま達也にしている話は、卓也が６年生になってからしてあげな」と鋭い指摘と共に、真剣にものいう私に言葉を返すには、相当の勇気がいったであろうと思うと、私の方がハッ！として、まさにその通りと思え、こんなお母さんでごめんね！という気持ちになり、「言ってくれてありがとう。達也に言われなかったらお母さん気づかなかったわ！ありがとね」と素直に言えた。すると、抱えていた、いらないものがまた私の中ではがれ落ちたそんな感じがした。長男と私は、心と心を通わす言葉を超えた受け取り合いができたことに、胸がいっぱいになり、二人で目に涙を浮かべウルウルしあった。その後長男は卓也を力いっぱい、愛いっぱい抱きしめていた。私はその光景から、言葉にはならない何か大切なものをたくさん教えられた気持ちになった。

私は、日々の瞬間の繰り返しのなかで子ども達から、更に自分を見せられ自分という者を見やすくさせてもらっている。何故かといえば、手に取るように子ども達の感情が伝わり、良いところも弱いところも少し前の私にそっくりで痛々しく感じてしまい、それに早く気づいてほしいという願いから、先急ぐ私の愚かさも見えてきた。今は、私が変わったのだから、愛する子どもたちも変わると信じられ、ゆっくりな変化を楽しめている自分がいる。いま私は心からの幸せを実感している。心が裸になる心地よさを味わい、今までの自分の通ってきた道すべてに無駄なものは何ひとつなかったと思え、すべてを受け入れ、自分が自分を生きられている。心がこんなことも思えるこのときの幸せを感じながら…。そして、この心こそが、私が子ども達に伝えたい本来の姿だと思えている。

心が愛で満たされ、自分を愛し人を愛し、心からの幸せを感じられ、人の幸せに喜びを感じられる心豊かな、今ここを生きられる人になってほしいと心から願っている。少なくとも、自分を見つめられる誠実さを持っていると、我が息子たちを見て思えるから、『大丈夫よ！ 』 と言えるのよね。

事例（２０）　子どもの心にそっと寄り添う

親が子ども理解を深め、精神的に安定した状態になると、子どもの言動を余裕をもって受け止められるようになる。あれこれと口や手を出すのではなく、そっと寄り添い見守り、待つことができるようになっていくのである。親の成長には、長い時間が必要である。次の手記は、トモエで５年を過ごし、学び、成長しつつある母によるものである。

今、青組のこどもたちはとても輝いている。いつかこんな日がくることはわかっていた。想像もしていた。けれど、実際目の前にしてみると、それは想像以上のものだった。ひとりひとりがとにかく輝いている。カメラのレンズのむこうで崖を登るその真剣な横顔が、友達と笑い合うその笑顔が、だれかをいたわるその言葉が、とても素敵なのだ。見ているうちに涙がじんわり出てしまう。わが子のことではないのにこんなに胸が熱くなって、こんなに興奮するなんて。こうしてアンテナをはっていれば色々なことを感じて、刺激を感じていられるなんて、私はとても幸せだ。

思えば弘章とのトモエ生活だって長かったのに、もう残りはたったの四週間。私がこの六年間、精一杯過ごしてきたのかと振り返ると、少し悔いは残るような気がしてしまう。けれど、そんな思いをちょっぴり軽くしてくれるような出来事があった。

それは、まだ冬休み前、2000 年の終りのことだった。その日は全員で沢探検の日で、とても冷え込んだ寒い朝、行き先はもちろん「氷のトンネル」。それまでも弘章は「今日は氷のトンネル凍ってるかなぁ」と、氷のトンネルの凍り具合がとても気になっているようだった。そして行った氷のトンネル…。凍ってるどころか、もうそれは芸術の域に達していて、滝のところなんか暗いとわかってはいてもシャッターをきらずにはいられない程だった。そして、おやじやトヨがそのぶ厚い氷を力づくで体を張って割ってくれる。もちろん群るこどもたち。もう、まるであやしい商売にはまっていくおばさんたちのように「僕も私も」と氷を欲しがるのだ。そして誰よりも大きい氷を手に入れようと、セリのように激しい争いがくりひろげられる。そこにはこどもらしい率直で素直な「欲」があって、みているととてもおもしろい。

そして、弘章もかなり大きな塊の氷をゲットしていた。それでもやはり氷のトンネルの状態が気になるらしく、もうみんなが戻ってきたトンネルへと、私とふたりきりで向かった。ゆっくりと川の中に雪を投げたりして遊んで、さっきの氷の市場のあたりまで戻ってくるともうほとんど人はいなかった。スタッフはトヨとおやじ、母子もほんの何組かだった。するとさとしが「アレ？　さっきのオレのこおりは？」といった。私は、まさかそんなに執着しているとは思っていなかったし、こんなところであんなでかい氷にへんに執着されても困るので、あっさり「さぁ…」とごまかした。現にさっきゲットした氷は私達がのんびり川辺タイムを過ごしている間に、登ったりすべったりする人たちの足元でもう形無いものになった様子だった。すると思ったよりも真剣に捜す弘章。そしてかなり本気で「オレの氷」と思っていたようだった。するとおやじがすばやくさっきのよりも更にぶ厚く大きな氷を割ってくれた。弘章は嬉しそうに、そして当り前のように「これ、持って帰る」と言った。

そんな、まさか、本気じゃないでしょ、まさかね、冗談だよね…だって持ち上げてみたら 20 キロぐらいあるし、だいたいこれをどうやってトモエまで上げるの…？

私がどうやって弘章を説得しようかと言葉を捜していた時、トヨがひとこと「そうだねぇ、どうやって運ぶ？」と言った。「は？　このひと一体何を…。」と、この流れだと、どうやら本当に運ぶことになりそうだと察し、一生懸命頭の中を切替えようとしている私をよそにトヨは続けた。「車でお母さんに道路まで来てもらって車に積むとかね。」確かにそこは、もうすぐ上が道路だった。その意見にちょっと「それ、いいかも。」とは思うものの、まだ私の頭は切かわっていない。だって普通持っていけるような重さではないのだから。

その間にも弘章とトヨの間では着々と相談の会話が交わされ、トヨは一度トモエに戻って何か道具をもってくるということになった。このあたりになって、いよいよ私もやる気になってきて、長いレンズのついたカメラをトモエに置きに行こうと思っていた。すると、緑組のひとりのお母さんが、

「よかったらカメラ持っていこうか？」と言ってくれた。天使だ。女神だ。その時の私にはカメラがあるのとないのとでは動きが全然違うのだから。こうして、一人のこどもの気持に寄り添ってくれるたくさんの人たちのおかげで、私達の苦しくも笑える、最高の思い出はできた。

私達母子は、まずトヨが戻ってくるまでに一段上までその氷をあげた。といってもほんの２メートルぐらいだ。戻ってきたトヨの手には、ソリと犬の散歩用ロープ。弘章とも相談してソリの上に氷をのせてロープでしばる。そしていよいよ出発。引っ張る弘章、下から押す私。トヨは…たいへんなほうを手伝いながら途中ほどけたヒモをなおしてくれた。とにかく、この３人の誰も欠けていては運べないという気がした。急な崖もダムのようになった直角の登りも、そして最後の長い長い登り坂も。弘章はほとんど一言もいわずにひたすら引っ張る。後ろから押しているとはいえ、結構な力だ。トヨは、はぁはぁ言っていても私にはちょっと余裕に見えた。私ときたら、息があがってしまうし、足も前に出なくなるし、大変だった。もう、気力と、「何とかして私も弘章の気持に寄り添いたい」という思いが私を動かしていた。そういうと大げさかもしれないが、本当に無我夢中だったのだ。

そして、とうとうどれくらいの時間がかかったかも私がわからなくなって、ちょっともうろうとしてきた頃、ゲレンデのふもとにたどりついた。そこには本気でビックリしてあきれている大和がいて、上から重い氷入りソリをひきあげてくれた。弘章はさすがに疲れはてていて、もう座り込んでしまった。それでも、私は大満足だった。弘章もとても嬉しそうだった。最後の力をふりしぼってソリを私の車の前まで運び、あとは帰りにふくろに入れて車に積もうということになった。何だか不可能を可能にした気がした。そして私達がそれをやったのだ。別にエベレストに登った訳でもフルマラソンを完走した訳でもないけれど、自分達で、できないと思ったことができた、という感じ。そして、子供のたったひとことを尊重して寄り添ってこられた、それによって一緒に喜びを味わっている、それが本当に嬉しかった。私ひとりがこうしてあげたいと思ってもできることではない。カメラを持っていってくれた女神様がいて、すばやく氷を割ってくれたおやじがいて、そしてもちろん、わざわざ道具を取りに行ってくれて、ずっと一緒に運んでくれたトヨがいて。　今もわが家のポストの足元に、その氷は、二周りくらい小さくなって置いてある。この氷が溶ける頃、弘章はもう小学生なのだと眺めている。トモエは自分次第だ。アンテナを張っていればすごい感動や喜びを味わったり、新しいものを見つけられたりもする。まだまだ残りの四週間、より一層感度を上げて過ごしたいと思っている。

事例（２１）　母と子の安定した信頼関係

母と子が相互に作用し合って情緒を安定させることによって、親子の絆は強まっていく。トモエでは、母子相互作用が良好に働くように、母と子を共に支援し指導している。次の手記には、６歳の女児と母親の良好な関係が表現されている。

香織が肺炎になった。入院することになり、処置室に入ってくださいと言われた。私は香織を抱いて入った。看護婦さんが中に一人いて、注射と点滴の準備をしていた。初めての入院で、香織はものすごく緊張していた。ずっと、「ママ、ママ、ママと…」と言い続けていた。中にいた看護婦さんは、「ここに寝かせてください」と言った。ベットに香織を乗せたが、私の手を握って離さない。看護婦さんはそれを見ながら、「お母さん、いない方が良いですよ」とやさしい感じで言った。どうしてか聞くと、「甘えて激しくあばれるんですよ」と言った。私にはその意味が理解できなかった。頭の中が『？？？』の文字でいっぱいになった。私は不安で一杯の香織をおいてこの部屋から出ていくこと

はできないと思った。そして、「この子は私がいた方が良いと思うんですよね」と言った。その看護婦さんは、「そうですか、じゃあ、お母さんにいてもらおうか」と言ってくれた。そして私は香織に、「ママがそばにいてあげるから、注射４回するんだけど、がんばってもらえる？」と聞いた。すると香織は大泣きしながら、ママがいてくれるんならがんばると約束してくれた。

間もなくもう一人の看護婦さんが勢いよくカーテンを開けて入ってきた。そして、私たちを見るなり、「お母さんは出ていた方が良いんですけどね！」と言った。私は思わず聞こえないふりをしてしまった。すると、きつい口調で「お母さん、出てもらえます？」と言った。私は「この子は私がいない方があばれると思うのでついています。」と言った。今度はものすごい顔で私をにらみ、「大あばれしますよ。看護婦２人で上から乗っかっても足りないくらいなんですよ。お母さん、責任、持てます？」と言った。『自分の子供に責任持てない親がどこにいるの』と口から出そうになったが、そこは堪えて、「責任持ちます！」と言った。それからその看護婦さんは、もう１人の注射を打つであろう看護婦さんに「お母さん、責任持つって言ってるから」と言って目くばせした。そして、ベットの脇に立った。とんでもない。香織の上にこの人を乗せさせてたまるかと思った。バスタオルで注射しない方の手は体と一体にされた。もしもあばれた時には全身で抱こうと思った。

４回のうち、１本目は採血。大粒の涙を流したものの、体をピクリとも動かさなかった。「いたいよ～、あと何回？」と聞いた。そんな香織に看護婦さんもビックリ！　ベテランっぽい年配の看護婦さんなのに、こんなの初めてと漏らした。３本目、４本目はアレルギーの検査なので痛いらしい。ものすごい悲鳴をあげたが、体を動かさなかった。ふと気がつくと、私も香織と一緒に泣いていた。私との約束を守ろうと、必死なのだ！　いよいよ点滴注射。「いたぁーい！」「いやだあ～」と声は大きいが、体は最後まで動かさない。私は香織をしっかり抱きしめた。看護婦さん２人とも本当に驚いていた。「なんて賢い子なんでしょう」と言われた。賢い訳じゃない。親子の信頼関係の深さなんだと思った。（ふふ。自信過剰な私！）もし、それが賢いとすれば、トモエにはいっぱいいるよね、賢い子…。

病室に入ってから、さっきの看護婦さんが「香織ちゃんは保育園に行ってるの、幼稚園に行ってるの？」と聞いてきた。私は待ってましたとばかりに、「トモエ幼稚園に行ってます。」と言った。そして、さっきの事を悪いと思ったのか、「香織ちゃん、えらかったからクッキーあげる」と言って差し出した。しかし、香織はその人からそれを受け取ろうとしなかった。私は少し焦って、「あとで食べようね」といって受け取った。『看護婦さん、子供はしっかり観察してるんですよ、あなたの言動を。そしてこれを機会に、子供をもっと理解する努力してくださいね』と心の中で言った。（またまた偉そうな私！）

病室で２人きりになってから、私は「よく我慢できたね」と言った。香織はにっこり笑って、「だってママと一緒にいたかったんだもん」と言った。私は「どうして注射の時、一緒にいちゃいけないんだろうね」というと、香織は「あまえるってどういうことか、わからなかった」と言った。「ママもわからない」と答えた。おそるべしわが子！

事例（２２）　ねぇ、自分のこと、愛してる？

母子関係が安定していると、母も子も素直に表現し合い、互いをより深く理解し合うことができる。この安定した母子関係が基となって、人は好きな人を見つけて人間関係を広げていく。人を好きになることは、自分を好きになることであり、それは母に受け入れられ愛されて育った自己肯定感が基盤

となる。
　次のレポートからも、母子の安定した関係が確認できる。

「ねえねえお母さん、自分のこと好き？自分のこと愛してる？」…トモエからの帰り、車の中で突然娘に聞かれたのは去年の１１月半ばのことでした。
**　娘にはそんなつもりはないのでしょうが、あまりに重い問いかけに一瞬言葉につまってしまい、運転を言い訳に返事を引き伸ばしました。でも、自分について、好きかどうかという視点で見ようとしても次々に欠点ばかり思い浮かび、大好きな自分なんて一体どこにいるんだろうと、悲観的な考えが頭をよぎります。それじゃ全部嫌い？と思うとそんな訳もなくて、まあ少し位は…たまには…いいところも見つかるかも、全く捨てたものじゃないかもしれない…イヤ何たって自分なんだから好きなことは一応好きかもしれない…などと希望的なのか悲観的なのか…。でもまあ長所短所ということではなくて、自分そのものを愛しているかということには、それよりもっと深い部分での自分への問いかけが必要なのは間違いないと思います。無条件に認められ愛されるべき自分が自分の中に生きているのかいないのかというのはかなり覚悟のいる問いかけですし、真の自己と向き合わなければならないわけですから…。**
**　結局のところ私の答えは、「そうねぇー（と伸ばしつつ）、うん、好きだと思うよ」という消極的なものになりました。それに対して娘は後ろの席で立ち上がり、「私はね、私自分のことだーい好き、すっごく愛してるの！」と自信に満ちあふれた声で言ってくれたのです。すごいなー子どもって、こんなに言い切れるなんて、とうらやましいような気持ちと共に、娘の心の中をあれこれ考えたりしました。**
**　それから一週間程経って、自宅でふざけながら娘を抱っこしていると「あのね…」と私の耳に小声で内緒話、「なあに？」と私、「あのね、知ってる？　みーんな自分があるんだよ」と言うのです。（エッ、何のことだろう）と驚きをかくしながら、「教えて」と私、「あのね、（外を見ながら）お花にも車にもみんな自分があるんだよ」と大事な打ち明け話のように教えてくれたのです。その後の会話の中で、＜自分＞というところを＜心＞と言ったりもしていました。**
**　前の、愛してるという話と考え合わせると、どうやら娘はそのころ、自分の中の自我の存在に気づき、自分を認める過程を通じて他者の中にもそれを見つけ認めたのだろうと思うのです。何だかできすぎた話のようですが、もちろん娘はそういうことを大人のように言葉によってではなく（表現できたのですから言葉も少しはあるでしょうが）、生活を通して感覚によってとらえたのだろうと思います。それにしてもお花にも車にもと考えるのが子供ならではでしょうか。**
**　改めて考えると、娘がこうしたことを自分なりにとらえた背景にはトモエの環境が大きく影響していると思うのです。娘は緑組から入園していますから、この話の頃はちょうど７～８ヶ月経ち、トモエにも慣れて自分を出せるようになり、少しづつ自信も芽生えた時期にあたります。**
**　トモエでは言うまでもなく、子供の人格を認めて暖かく見守ることのできる教師や大人達に囲まれ（私個人はちょっと危ないですが）、また自然との触れ合いの中で自分を実感できる機会にも多く恵まれています。うまく書けませんが、トモエの環境から得たものが娘の思考の源に大きく働きかけていることは確かだと思います。たまたま娘は心の中で育ちつつあるものを、鈍い母親にもはっきりわかる形で見せてくれたわけで、大人が思う以上の子供の思考の深さと広さ（言葉にはならなくても）を垣間見せてくれた出来事でした。**
**　一年が過ぎ、今また「自分のこと、好き？」って聞かれたとしたら、やっぱり自信のない私ですが、**

三女の卒園の頃までには何とかもう少し“自分が好きになる子育て”ができているようにと願っているのです。

事例（２３）　自己を認識する能力を子どもは自分で育てていく

乳幼児は素直に自己を表現する。その表現を通して自己を認識し、自己の言動を調整することを学んでいく。脳生理学的には、８歳ころまでに自己判断能力を確立し、自己調整ができるようになるのである。

次のレポートは、トモエのスタッフが我が子に関して綴ったものである。このスタッフは４人の子どもの父親であり、長年子どもたちを観察して子ども理解を深めてきた。彼の客観的で幅広い視点から、多くを学ぶことができよう。

４女の千佳が誕生してもうすぐ４か月です。もう首も座り、嬉しい時にはニーッと笑うようにもなりました。時々ケタケタと声を出して笑い、こちらがびっくりしてしまうこともあります。千佳には３人もお姉ちゃんがいるので、彼女の回りはいつもにぎやかなこともあってか、今のところ反応の良さでは一番かもしれません。妻はどうやら一人ぐらいホワ～ンとした子（カレーのコマーシャルに出てくる「おいしければいいじゃない」と言う子）がいてもいいと思っているようですが、どうやらそれもかなわぬ夢のようです。まあ、子どもは思ったようになど育たない方がいいという面もあるので、いいのではないでしょうか。

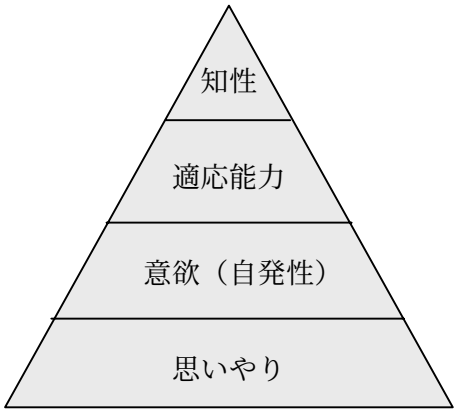
まあ、千佳はおいておいて、問題なのはすぐ上のお姉ちゃん絵里です。２歳半しか離れていないため…、といってもそんなに珍しいことではありませんが、わが家の場合は長女の芙美と次女の由貴が３歳半、由貴と３女の絵里にいたっては４歳半も離れているので、上の二人は下の子が生まれた時はそれなりに聞き分けも良くなっているというか、自分でも気持ちのコントロールができるようになっていたといえるかもしれません。しかし２歳半で下に妹ができた絵里の場合は、まだ自分をコントロールするのに大変です。絵里にしてみれば千佳が生まれるまでは、世界は自分中心に回っているようなものでした。しかしそれも２年半で終わり、また彼女にしてみればその日は突然やって来たのですから、かわいそうなものです。といっても、こちらはどこかでそれを楽しんでみている訳ですから…よけいかわいそうだったりして…。

絵里にしてみれば、自分の世界を奪った張本人の千佳に直接荒々しい態度をとるわけにもいきません。かわいさ余って憎さ百倍のところをグッと我慢するわけですから、そのエネルギーはどこかに向かわざるを得ません。それは今のところ、すぐ上の由貴に向かって発散されています。仲良くままごとをして一緒に遊んでいる時もあります。しかし、何が気にいらないというのでもなく、由貴に対しては反抗的なのです。由貴が読んでいる本に目が行くとそれを取り上げる、由貴が持っているおもちゃやクレヨン、鉛筆、食べ物…、もうありとあらゆるものを自分のものにしようとするのです。知っている人は知っているように、由貴も結構負けん気が強いので決して負けはしないのですが、そこはお姉ちゃん、相手が４歳半も下となれば手加減しないわけにもゆかず自分を抑えると、それに乗じて絵里が大きな態度をとるものだから、さすがの由貴も泣きを見ることがあるのです。由貴のおさまらない気持ちはどこへ向かうかというと、その上の芙美に向かうわけです。芙美はさすが長女だけあって、といきたいところですが、これが３歳半も下の妹にばかにされまいとするのか結構マジに反応するので、時に取っ組み合いのけんかになったりするのです。やられるのは決まって由貴です。千

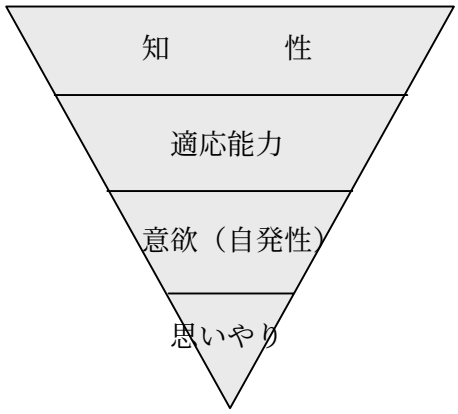
佳が生まれて一番かわいそうなのは、由貴かもしれません。
　話は絵里の方に戻りますが、彼女の由貴に対する反抗を見ていると、そこには単なる反抗ではなくて、何か大きな意味を感じます。自分が世界の中心にいた…、家族のみんなからいつも「一番」注目されていたし、望めばたいてい抱っこしてもらえ、お母さんはいつも自分の方を向いて寝てくれていた…。それが千佳の誕生で一転した…、自分以外に「一番」が移ってしまった、彼女にしてみたら二番なんて「一番」に比べたらないに等しい、今まで「一番」の座で感じていた自分という世界はもうどこかにいってしまった、…何とか自分を取り戻そう！…そんな感じに見えます。
　ギャングと化した絵里は、由貴が楽しそうに使っているものを取り上げるだけではありません。時には由貴が千佳をあやして遊んであげていると、「私が遊ぶんだ！」とあの憎々しいはずの千佳をも由貴から奪ってしまうのです。その時、彼女の心は、由貴に対する反抗を越えて自分の世界を奪った相手を支配したという満足感に浸っているのでしょうか。いずれにしても、自分のものではないもの（人）を自分のものにするということで感じる充足感、それを積み上げることで絵里は自分というものを感じようとしているようです。自分とは何か（自分を知る）という生きる上での大きなテーマに、今２歳９か月の人（あえて子どもといわない）も取り組んでいるのですね。
　冬休みのスタッフの研修会で免疫の勉強をしました。人間の体には外からはいってきた菌やバクテリヤを殺す細胞、いわゆるミクロの戦士たちがいます。それらは骨の中の骨髄幹細胞で作られますが、それも同じ細胞から好中球、マクロファージ、リンパ球などが作られるというのが不思議ですが、リンパ球の中でもヘルパーＴ細胞というのがそれらミクロの戦士たちの司令官なのだといいます。というのは、ミクロの戦士は体内に入ってきた外敵を「非自己」として「自己」と区別して攻撃を加えるわけですが、その「自己」か「非自己」かを区別するのがヘルパーＴ細胞なのです。この細胞からの司令を受けて、他の細胞は外敵をやっつけるのです。そして実はこのヘルパーＴ細胞は、最初からそうした能力を持っているのではなく、骨髄で生まれて血管を回り心臓にへばりついている胸線というところで、驚いたことに司令官として育てられるというのです。そのメカニズムはまだはっきりわからないそうですが、人間の体は、外敵（「非自己」）を見分ける（知る）能力を自分で育てていると言えます。ということは裏を返せば、自分（「自己」）を知るという能力も自分で育てていることになります。
　このことを勉強しながら、僕は絵里が自分（自己）を知ろうとしている姿を思い出し、人間は（細胞の場合とはかたちは違うけれども）精神的な能力としても自分を知る能力を自分で育てているのではないかと思いました。どこまでいっても知り終ることのない自分に対して、知る能力を自分で育てながらつき合っていく、人間にはそんな力が備わっているのではないかと思ったのです。

＜参考資料＞

＊『スキンシップで心が育つ』平井信義（企画室 KK）より



＊安定した三角形



＊不安定な逆三角形

・　人　格　構　造

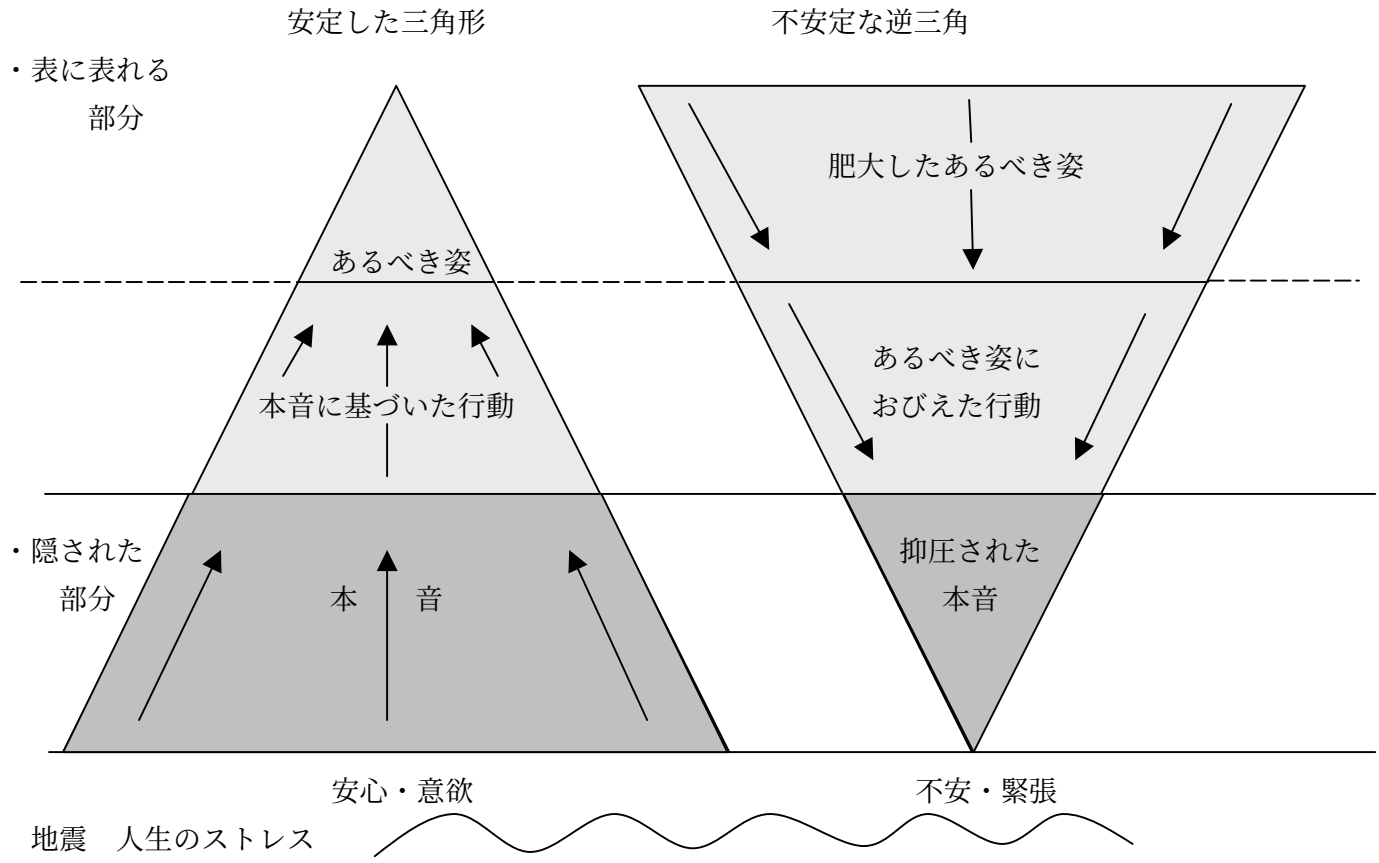
『子どもの心の発達ということを考える場合、私は四つの柱を立てて考えています。

**　そして、最も大切な柱から順次に層を重ねて、三角形を描いています。ですから、お母さん・お父さんが子どもの心を育てるにあたっては、右の図の下の層にある要素ほど十分に注意を払わなければなりません。**

**　知性はいちばん上にありますが、それがいちばん大切なものというわけではないのです。むしろその逆に、人格形成の上での大切さの順位から言えば、四番目になるのです。**

**　「思いやり」や「意欲」といった心の基礎的な要素を十分に養うことなしに、知的能力の発達にばかり励みますと、いわゆる頭でっかちの逆三角形となり、ちょっとした困難で挫折してしまうようなもろい人格構造になってしまいます。受験戦争の低年齢化で、近年そのような人格構造の子ども達がふえているのは大変心配なことです。』**

＊『子どもを伸ばすお母さんのふしぎな力』渡辺久子（企画室 KK）より



『心の構図は、図のように三角形で表されます。日本が経済成長を続けて、物質的に繁栄すればするほど、心は本来の姿を失って不安定になり、逆三角形に移行していくようです。本来の安定した三角形であれば、少々のストレスがあっても、その安定性は揺らぎません。しかし、現代の日本人は、経済的な繁栄を追い求めるあまり、心のゆとりを失い、本音よりも表向きのあるべき姿が肥大して頭でっかちになり、ちょっとしたストレスでたちまち倒れてしまうのです。

大人たちがそうであれば、子どもたちもその影響をもろに受けて、心がストレスに弱い逆三角形構造になってしまっているのです。そのことが子どもの心の問題の増加の根本の原因ではないかと思います。そして症状として現れなくても、今の多くの子どもが持っている心の不安定感の原因になっているのです。

どうすればいいのでしょうか。

何よりも子どもからプレッシャーを取り除き、本音が出せるようにし、守り育ててやることです。うれしいことに子どもは、成長し発達するという大きなエネルギーがあります。親が守り支えてやるだけで、みるみる心の土台が息を吹き返し、裾野の広い安定した三角形の心に復元していく力があるのです。

しっかりした心の土台を作ってやること。これこそ、今の時代に、私たち親の大切な役目なのです。そしてそのためには、私たち親の心が安定した三角形であり、子どもの心をしっかり感じ取り、ゆったり受け止められるようになっていなければなりません。

子どもは、お母さん、お父さんに寄り添って生きています。お母さん、お父さんが安定して、幸せでなければ、子どもも幸せな気持ちになれないのです。』

『子どもの心が順調に育っているかどうかを確かめるために、親は次のようなポイントに注意してみるといいでしょう。
・家庭の中、特に母親の前で安心して自分の本音が出せているかどうか。泣きたい時に泣き、怒りたい時に怒り、その後はカラリと穏やかな心に戻れるかどうか。甘えたい時には、遠慮せずに母親に体で甘えてこられるか。
・自分の考えや感じ方を持っていて、お母さんが良いと思って押し付けても、いやなら「いやだ」とはっきり断れるかどうか。やりたいことを自分で見つけて、失敗を恐れずに挑戦できるかどうか。また、もし失敗しても、それほどこだわりなく気をとり直せるかどうか。
・対人関係であまり緊張しないで、ありのままに近い自分の気持ちが出せているかどうか。』

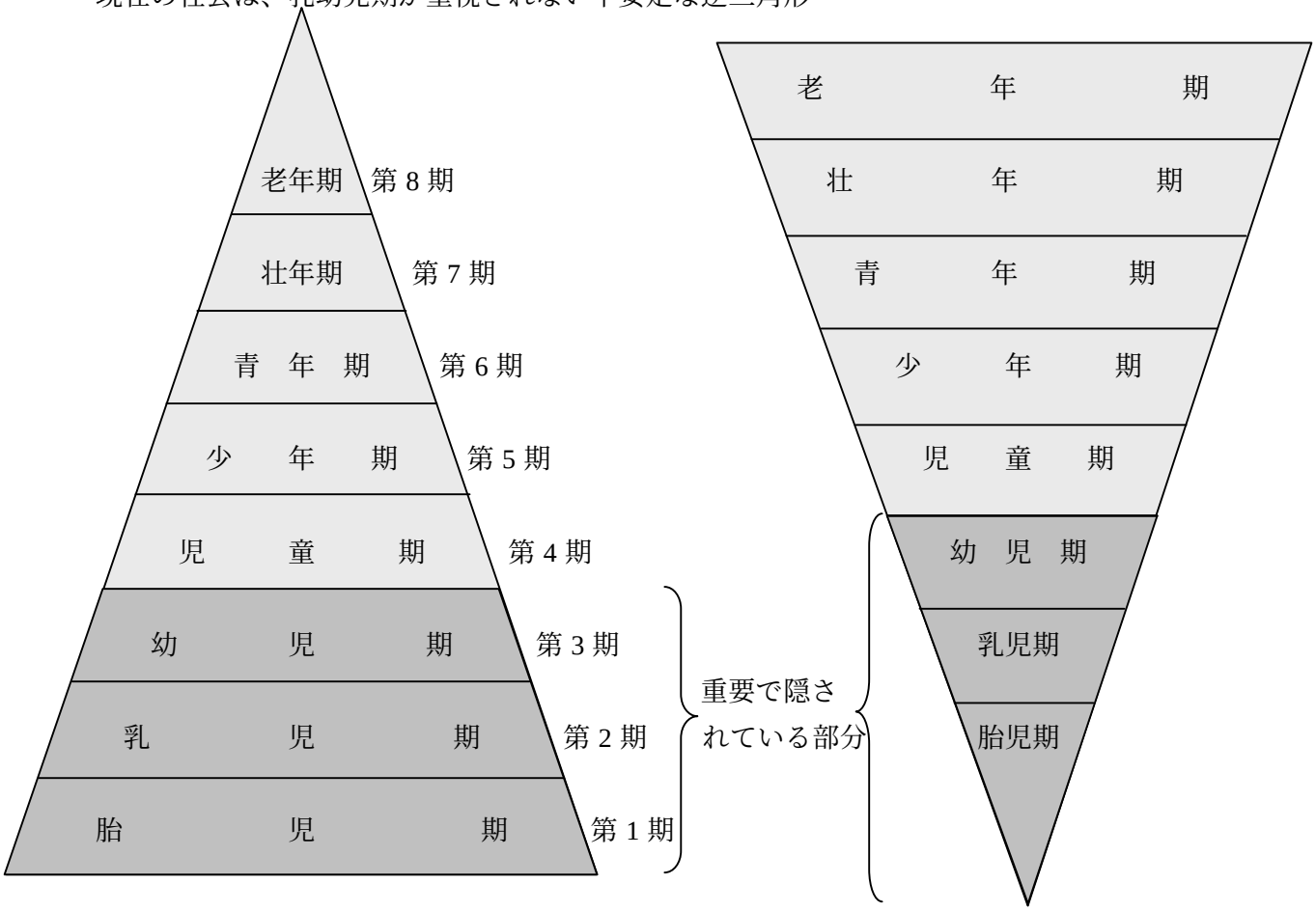
＊胎乳幼児期の情緒安定が基盤となる基礎的人格形成（木村仁）

安定した人格構造は、平井氏の述べる「思いやり」と渡辺氏の述べる「本音」が基礎となるといえよう。そしてどちらも乳幼児期に、その基盤が創られるのである。

多くの親子を観察し相談を受けていると、安定した三角形を形成できないで育つ人間が急速に増加しているのが現代であることがわかる。幼少期に「知性」や「あるべき姿」を強要されて、不安定な逆三角形型の人格を形成してきた人は、自分を見失いがちで、心のバランスをとれずに苦悩しているのである。

トモエの実践では、親も子もスタッフも自分の本音を素直に表現できる人間を養うことが、人間教育の基盤であると考えている。大人が自分自身の可能性を信じて待てなくては、子どもが素直に表現する精神環境を創ることはできないのである。子どもが素直に表現できない環境の中では、大人が子どもの心を理解することはできない。子どもが心から語りかけてくることに対して、大人が聞こうという態度（思いやり）ができていれば、子どもは心を開き素直に表現できるのである。素直に表現されてはじめて、会話が始まるのである。その前提となるのが、親やスタッフ自身の素直な表現である。

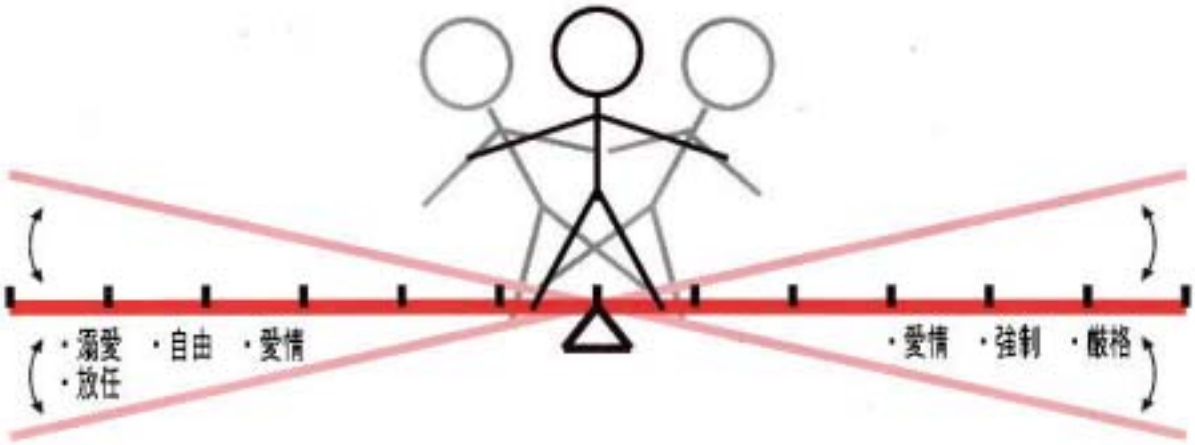
現在の社会は、乳幼児期が重視されない不安定な逆三角形



人間はすべて、胎児期･乳児期･幼児期をへて成長する。胎乳幼児期を人間教育の基礎として重視するのは当然のことである。しかし、胎乳幼児期は軽視されているのが現状である。小中高大学の教育と乳幼児教育とを比較してみると、それは歴然としている。胎乳幼児期の人間探求がなされないままで、小学校以降の教育が行われているのである。

脳生理学から見ると、３歳までに脳神経細胞の６０パーセント、６歳までに８０パーセント以上が組織化される。この６歳までに、脳神経細胞の発達と共に個々の個性や気質の基盤が創られ、動物的感覚が身に付く。現在の人間のあらゆる心の病の問題は、胎乳幼児期の安定した人間教育を軽視してきた結果といえる。人間教育の基礎となる胎乳幼児期の環境は、最も重要視されなければならない。

＊情緒が安定し心のバランスがとりやすい親子の関わり



「人間は考える葦」である。大人も子どもも年齢に応じて考え、悩みながら左右に揺れ動いて生きているものである。親がどちらかに偏ると、子どもも共に偏ってしまうのである。特に乳幼児期は、親に依存する度合いが高い時期ゆえに、親の揺れ方による影響が大きい。

親が左右どちらかに偏り過ぎると、子どもは心のバランスを失う。親が左右に激しく揺れ動くことでも、子どもの心も激しく揺れ動き、不安定になる。

現代の若い親たちは、放任か厳格か、どちらか極端に育てられた人が多い。したがって心のバランスがとりづらい人が多いので、子どもを産んでどのように対応すればいいのかわからずに悩んでいるのである。

＜参考文献＞

＊『乳幼児精神医学』J.D.コール・E.ギャレンソン・R.L.タイソン（岩崎学術出版社）
＊『こころの科学～母子臨床』渡辺久子編（日本評論社）
＊『別冊・発達～乳幼児精神医学への招待』小此木啓吾・渡辺久子編（ミネルヴァ書房）
＊『別冊・発達～乳幼児精神保健の新しい風』渡辺久子・橋本洋子編（ミネルヴァ書房）
＊『母子臨床と世代間伝達』渡辺久子（金剛出版）
＊『抱きしめてあげて』渡辺久子（彩古書房）
＊『狼に育てられた子』J.A.L シング（福村出版）
＊『赤ちゃん学を知っていますか』産経新聞「新・赤ちゃん学」取材班（新潮社）